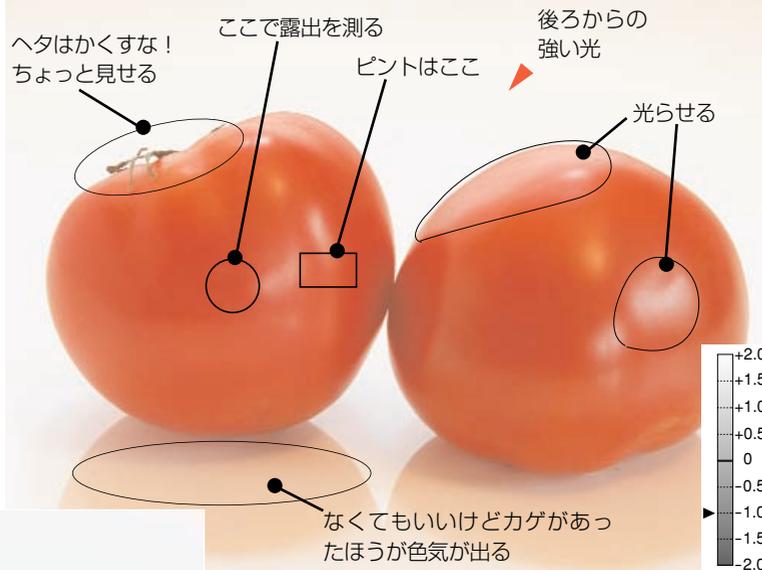


Point

テカらないと
まずく見える



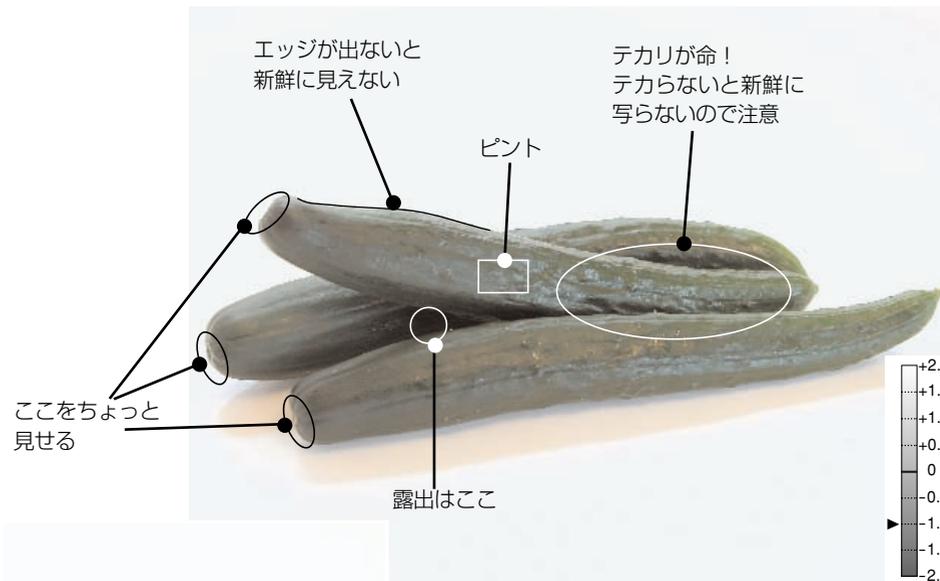
カメラの適正露出
明るく写りすぎて
美味そうに見えない

撮影 ほぼ真横、
斜め上30度から
撮影



見たとおりに補正 マイナス1露出補正する。
トマトの赤い色が濃く写り美味そうだ

濃い色
トマト



カメラの適正露出
明るく写りすぎる

撮影 斜め上60度
くらいから撮影



見たとおりに補正 マイナス1露出補正する
るとちょうどいい感じに写る

濃い色
キュウリ

◆カメラは黒く見ている
トマトのように色の濃いものをカメラの露出計は単に「黒い」と判断する。だから、カメラの適正露出に合わせると真っ赤なトマトがしらっ茶けて写る。トマトはあくまでも真っ赤に写らなくては美味そうに見えない。

トマトをトマト本来の濃い赤に撮影するには、カメラの測った適正露出よりも少し暗く（アンダーに）露出を調節しなくてはいけない。

コンパクトカメラの場合は露出補正ボタンをマイナス1にセットする。補正ボタンの値を少しずつ変えて数枚撮影してよいカットを選べるとよい。

マニュアル露出機能のついてるカメラの場合はシャッタースピードを一定にして絞りの値をカメラの適正露出のF値よりも大きな数字のほうに一段ずつ動かして数枚撮影する。その中からもっともよいカットを選べるとよい。

◆重量感と深緑を撮る
キュウリは朝のイメージである。和食の王様である。が、決して目立たず、メインの食材ではない。いぶし銀の味わいを持ち、しかしさわやかである。

アスパラが洋であるのならば、キュウリは間違いなく和である。

和であるとするならば、その表現は、しっとりとした情感あふれるものでなくてはならない。つまり、落ち着きである。安定である。改革路線など物ともしないどっしりとした保守本流である。

このイメージは重々しさにつながる。重々しさはある種の「暗さ」にも通じる場所がある。

キュウリを美味そうに撮影するためには、どっしりとした重量感を伴う暗さがその緑を際立たせるのだ。

暗さを求めるのであれば、カメラの適正露出よりも暗く、つまり補正をマイナス1で撮影すればいいのだ。だまって撮ったら白っぽいキュウリになって和の渋さは伝わらない。